Ⅰ　研究主題

喜界島の伝統文化に誇りをもち，受け継いでいこうとする 児童を育成する教育課程の創造

Ⅱ　主題設定の理由

１　社会の要請

グローバル化や人工知能などの技術革新が急速に進む中，アイデアや知識，人材をめぐる国際競争を加速させる一方で，異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増している。また，日本人が海外へ出て異なる文化に触れる機会や日本を離れて国際社会で活躍する場面も増えてきている。

このように，これからの時代には，国際社会の一員として生きる日本人としての自覚とともに，郷土や我が国の「伝統と文化」を大切にする心をもつことがますます重要になっている。

そこで，子どもたちに，まず自分たちの身近に過去から大切に受け継がれてきた郷土の伝統文化があることに気付かせ，体験を通して理解を深めさせ，そのよさを感じさせることが大切であると考える。そのようにして自分たちの郷土の伝統文化に誇りをもたせることで，郷土に生きる一員として大切に受け継いでいこうとする子どもを育成することができるのではないかと考える。

２　学習指導要領より

教育基本法や学校教育法において，日本の伝統や文化に関する教育が重視されている。中央教育審議会答申においても，現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力として，「日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し，我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること」などが重要であるとされている。これらを受けて，新学習指導要領においてもその教育内容の充実が図られたところである。

また，今回の改訂では，社会に開かれた教育課程がキーワードとなっており，地域社会と連携したカリキュラムの開発，教科等横断的なカリキュラム等のカリキュラム・マネジメント，その指導方法の工夫・改善が求められている。

そこで本校では，「伝統や文化に関する教育」（以降，「伝統文化教育」とする）について，地域や関係機関・団体等との連携を深めながら，教育資源を生かし，教科等横断的な視点で教育課程を見直し編成していくことが必要だと考えた。そうした教育課程に基づいた授業改善により，地域の伝統文化を大切に受け継いでいこうとする児童の育成ができるのではないかと考える。

３　児童の実態

本校では，主に４年生の総合的な学習の時間にシマ唄・シマゆみた（喜界島の方言）を郷土素材として取り入れた活動を行っている。運動会では，毎年全校で地域に伝わる「八月踊り」を踊るなど，地域の方の協力を得て，伝統文化に親しむ活動の充実に努めてきた。また，昨年度より各教科と伝統文化教育を積極的に

関わらせ，学習の中でシマゆみたに触れる機会が多くなってきた。

喜界島に存在するたくさんの伝統や文化の存在にも目を向け始めているが，自ら新たな課題を見付けたり，自ら追究したりする力が十分とは言えず，大切に守り，受け継いでいこうという意欲までには繋がっていない。

そこで，地域の方や関係機関・団体等との連携を一層図り，より興味をもって伝統文化に対する理解を深め発信する指導法の工夫や，教科・領域等での横断的な指導等について実践研究を通して明らかにし，主題に迫りたい。

4　令和元年度の研究活動から

令和元年度より，教育課程の見直し改善に取り組み，伝統文化教育の全体計画や年間指導計画の作成を行っている。育てたい子どもの姿を発達段階に応じた到達目標＜図１＞で示し，教科等横断的に伝統文化に関わる授業を実践している。伝統文化教育を通して，児童が地域のよさに気付き，伝統文化を大切にする思いを持ちはじめてきている。また，地域及び関係機関・団体等との連携体制の在り方についても，専門家や研究団体と連携した指導法研究を行ったり，校区内の区長と研究内容や取組を共通理解し，協働したりしながら伝統文化教育を推進してきた。

１年間の取組の成果として，「シマゆみたが少し分かる」と答えた子や「八月踊りが少し踊れる」と答えた子が増え，子どもたちに学習内容の定着が見られた。（詳細は巻末のアンケート調査参照）また，子どもだけでなく職員も，地域の方々との関わりの大切さやよさを実感することができた。

しかし，令和元年度の取組は子どもたちの自主性や意欲の向上に繋げられなかった。また，伝統文化教育の軸となる教科・領域が不明確なままの実践になってしまっていた。さらに，令和２年度より教科用図書も新しくなったため，伝統文化と各教科の単元間のつながりの見直しも必要となった。

そこで，学年ごとに身に付けさせたい資質・能力を明確にした教科等横断的な授業実践を行い，伝統文化への思いを高められる環境作りをさらに充実させるとともに，実態調査に基づく効果的な指導法研究，伝統文化教育を継続的に推進するための社会に開かれた教育課程の編成を図っていくことにした。

＜図１＞

子どもに身に付けさせたい資質能力の基盤として，「気付く」「理解する」「誇る・発信する」の３つを掲げた。子どもの発達段階に応じた重点項目を，

【低学年】気付く力
【中学年】理解する力
【高学年】誇る・発信する力
とし，教育課程編成における学年別伝統文化教育年間指導計画を作成する際に単元の内容と身に付けさせたい力との関連を色を分けて示した。

Ⅲ　研究の仮説と研究の内容

１　研究の仮説

地域の方や関係機関・団体等との連携を一層図り，伝統文化に対する理解を深め，発信する指導法の工夫や，教科等横断的な指導等について実践研究を通して明らかにし，子どもたちがより興味をもって伝統文化に対する理解を深めることができるようにするため，以下に示す二つの柱の下，仮説を立てることとした。

（柱１）社会に開かれた教育課程の実現に向けて

仮説１　伝統文化教育の全体計画や年間指導計画を作成し，教科等横断的な視点で系統的に指導を行えば，教職員の伝統文化や地域に関する意識が高まり，資質・能力を確実に育成することができるであろう。

仮説２　学校の取組を積極的に公開し，ＰＤＣＡサイクルの機能化を図れば，地域の理解や協力への意識も高まり，学校と地域が参画しての伝統文化教育が推進されるであろう。

（柱２）郷土のよさに気付き，受け継いでいこうとする児童の育成

仮説３　方言や八月踊りを体験的・探究的に学べる学習内容を系統的に位置付ければ，地域のよさに気付き，理解を深め，地域に誇りをもつ児童を育てることができるであろう。

仮説４　地域との交流学習を計画的に位置付け，島民の思いに触れながら学習を展開すれば，伝統文化を継承していこうとする児童を育てることができるであろう。

２　研究の内容

(1)　教育課程の見直し改善
- ○　指導内容及び方法の工夫改善に伴う見直し
- ○　教科・領域における横断的な指導の工夫
- ○　伝統文化に関する指導の体系化

(2)　地域及び関係機関・団体等との連携体制の在り方
- ○　地域と連携・協働したＰＤＣＡサイクルの確立
- ○　地域人材を活用した連携体制の構築及び指導法研究

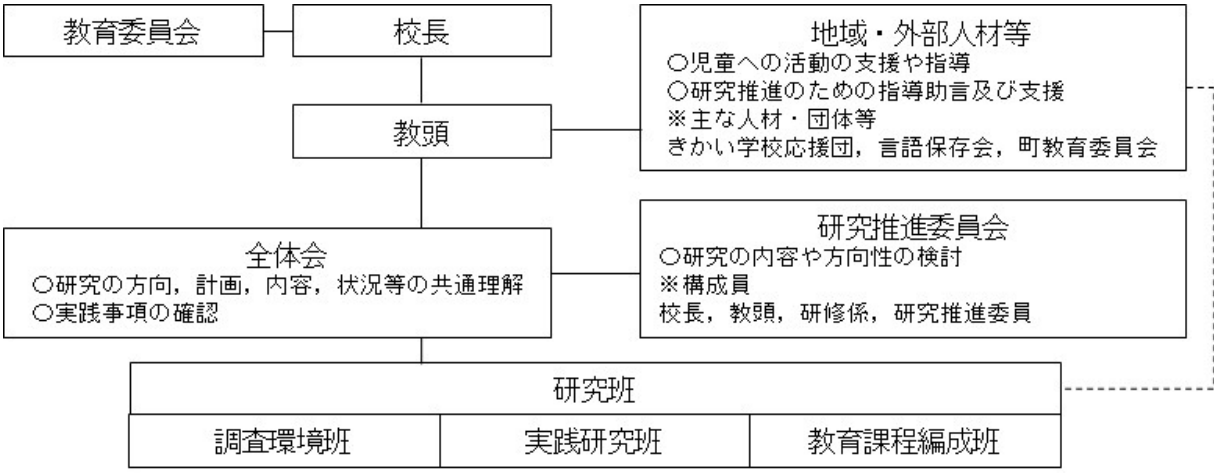
(3)　指導法の工夫改善
- ○　興味をもたせる導入及び取組の工夫
- ○　伝統文化に対する理解を深め発信するための指導法の工夫
- ○　学校と地域のつながりの深化を図る取組

(4)　伝統文化に関する実態調査と分析・考察
- ○　児童・保護者・職員・地域の意識及び実態調査
- ○　結果分析と課題把握

令和元年度より，次の＜図２＞に示す組織体制で班活動を行い，研究を進めてきた。本研究２年目にあたり，実態調査をもとにこれまで行ってきた伝統文化に関する実践を体系化し，生活科・総合的な学習の時間を軸とする学年のつながりをより明確化させた教育課程編成を行っていきたい。

◇　研究組織図

本研究を推進するにあたり，研修の見通し・共通実践等をより高め，全職員の共通理解のもと協働が図れるように外部機関を含む組織の体制づくりを行った。



〈図２〉

◇　研究構想図

本研究では，社会に開かれた教育課程の実現を通じて，「喜界島の伝統文化に誇りをもち，受け継いでいこうとする児童」の育成を目指している。

カリキュラム・マネジメントについては，以下の三側面から捉える。

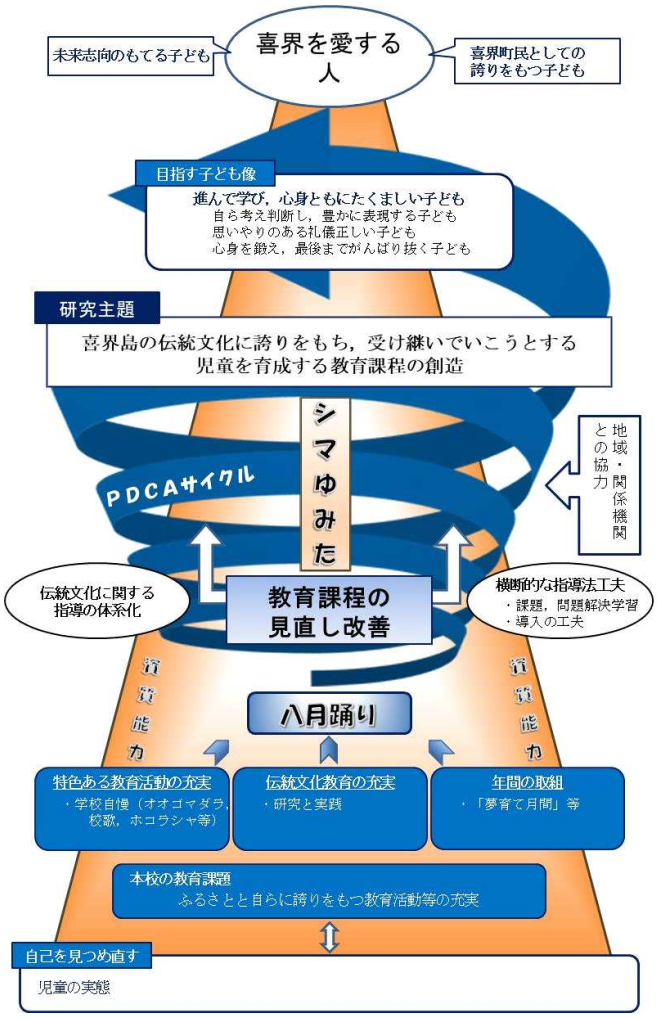
１　各教科等の教育内容を相互の関係で捉え，学校の教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で，その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

２　教育内容の質の向上に向けて，子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき，教育課程を編成し，実施し，評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立すること。

３　教育内容と，教育活動に必要な人的・物的資源等を，地域等の外部の資源も含めて利用しながら効果的に組み合わせること。

これらの３側面を基に本校の実態に応じて，以下の研究構造図〈図３〉を作成した。

研究構造図



〈図３〉

シマゆみたや八月踊りの学習を家庭や地域の方の協力をいただきながら共に取り組み，連携を深め，家庭・地域と学校が「地域愛に満ちた子どもの育成」という同じ価値観で未来志向のもてる子どもを育成し，さらに，喜界島を愛する人に育てていくよう取り組んでいく。１年目の研究を積み，本校の特色を取り入れた新たな目指す「喜界を愛する人」の像を以下のように変えることにした。

喜界を愛する人

- 社会的・職業的に自立した人間として，我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち，人生を切り拓いていくことができる人。
- 対話や議論を通じて，集団としての考えを発展させたり，他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができる人。
- 変化の激しい社会の中でも，新たな価値を創造していくとともに，新たな問題の発見・解決につなげていくことができる人。

Ⅳ　研究の実際

1　教育課程の見直し改善

(1)　指導内容及び方法の工夫改善に伴う見直し

昨年度，前担任が中心となり令和２年度の教育課程を編成し，新年度を迎えた。本年度より新しい教科書になり，各教科の単元の入れ替えが多くあったため，再度見直す必要があった。そこで，新しい教科書を活用した授業実践を行いながら「伝統文化に関係する内容」の単元名を，教育課程の年間計画に朱書きしていった。

【第６学年　国語】　※デジタル教科書，デジタルコンテンツの活用　「カッコ付きの※伝統文化教育」は取組可能と思われる単元

学期	月	単元名・小単元名		時数	備考（教科等横断的な視点，使用備品，人的・物的資源の活用　等）
	4月	【書写】<時数１>	つないで，つないで，一つのお話	1	
	(13)	○できているかな	春の河／小景異情　続けてみよう	1	※伝統文化教育
		1　いつも気をつけよう	帰り道	4	
		○学習の進め方	地域の施設を活用しよう	1	※伝統文化教育（地域にゆかりのある作家）
		○用具のじゅんび	漢字の形と音・意味	2	※伝統文化教育
		○用具のかたづけ			

(2)　教科・領域における横断的な指導の工夫

次に，伝統文化教育年間も作成した。昨年度は「喜界島」を視点にし，各教科，特別の教科「道徳」，総合的な学習などから単元を洗い出していった。しかし，教科等横断的に見た際，「分かりにくい」，「漠然としている」という意見が出された。

そこで，令和２年度は，「言語（シマゆみた）」を視点とし，学年ごとに再度，伝統文化に関する単元等を挙げていった。教科等横断的なつながりが分かるように矢印（→）を入れた。また，地域人材を活用する単元には星印（☆）を単元名の後に入れ，活用しやすくした。

言語を視点に，つながる教科の中の単元に矢印を引いていったことで矢印が「言語（シマゆみた）」に向かっていくことが分かる。

第２学年　伝統文化教育年間指導計画

教科・領域	4月	5月	6月	7月
行事		参観日☆		
国語	春がいっぱい☆	いなばの白うさぎ	こんなもの，見つけたよ	夏がいっぱい☆
生活			どきどきわくわくまちたんけん	
音楽	音楽でみんなとつながろう			
図工		おはなみスケッチ（スケッチ大会）		まどからこんにちは
体育				

(3)　伝統文化に関する指導の体系化

カリキュラム・マネジメントの「教科等横断的」「人的・物的資源の活用」を踏まえて作成した。

伝統文化教育全体計画では，方言（島ゆみた）について身に付けておきたい資質を低・中・高学年それぞれ作成した。（☆は方言についての資質）

☆は方言についての資質

＜低学年＞

［気付く］
○地域の自然や文化，人との触れ合いを通してよさを発見し，親しみをもつ。
○発見した地域のよさが，自分たちの生活と密接に関係していることに気付く。
☆簡単な方言をある程度理解できる。

＜中学年＞

［理解する］
○地域の伝統文化に関する課題を設定し，体験的・探究的な学びを通して，理解を深める。
○地域の方々との交流学習を通して，島民の思いや願いに気付き，伝統文化に対する理解を深める。
☆簡単な方言で答えることができる。

＜高学年＞

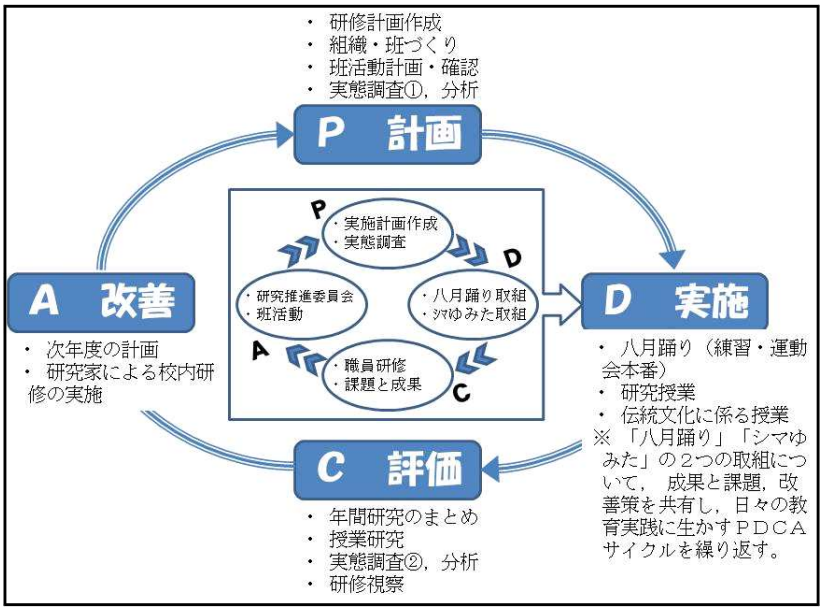
［誇る・発信する］
○地域の伝統文化を尊重し，探求的に学んだ地域のよさを分類・整理・分析して広く発信する。
○地域の方々との交流学習から，自身も地域の伝統文化を継承する一員であることを認識し，生活する。
○我が国と郷土を愛する心情をもつ。
☆簡単な方言で，自分の気持ちを伝えることができる。

２　地域及び関係機関・団体等との連携体制の在り方

(1)　地域と連携・協働したＰＤＣＡサイクルの確立

ア　先進校への視察

令和２年２月２１日，熊本県八代市立植柳小学校にて教育課程研究（伝統文化教育）に関する研修視察を行った。地域との協働，ふるさとを誇りに思う児童というキーワードが本校と重なる部分が大きく，課題についても，本校が抱えているものと重なる部分があった。　　〈図４〉



①　伝統文化へ子どもたち自身がどのように参画していけるか。

②　家庭・地域の方々が伝統文化教育へ参画する意欲を結び付けるにはどうすればよいか。

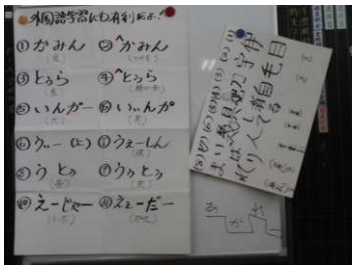
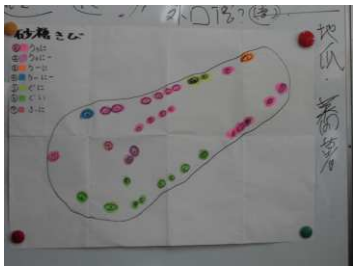
研究視察により，目指す子どもの姿がより具体的なものとなった。示された課題に対して，本校の子どもたちの実態や環境的な要因も合わせた視野をもって研究を続けていきたい。

イ　言語研究者による研修（喜界島言語文化保存会：生島常範氏）

８月３日，「伝統文化教室ｉｎ早町」と題して，言語文化保存会の生島常範氏を特別講師に迎え，職員研修を実施した。生島氏は，「喜界島言語文化保存会」の他に「喜界島郷土研究会」「上嘉鉄八月踊り唄保存会」「上嘉鉄シマ唄・三線倶楽部」「上嘉鉄しまゆみた語ろう会＆はたろう会」という数々の会を立ち上げ，島の伝統や文化の保存・継承活動に取り組んでいる。昨年度の荻野氏（福岡教育大学准教授）の講義内容を受け，今回は，シマゆみたの「発音」について詳しい話をしていただいた。

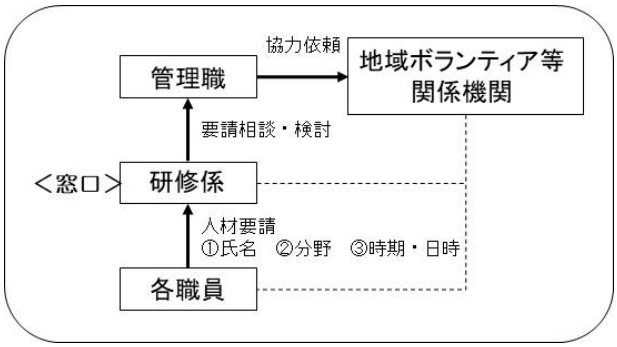
消滅危機言語と言われる喜界語は，無形文化である。だからこそ，方言の「見える化」が子どもたちの環境には大事なのだと生島氏は語った。そして，消滅を回避するためには何に重きを置くべきなのかと問うたところ，「教育」と仰った。学校での教育，家庭での教育，地域での教育。そこで方言の価値や尊さを正しく教えることが大事なのだと自身の経験を交えて伝えてくださった。

また，この小さな島の中に日本の言語文化の歴史と進化が全て詰まっているということも教わった。これは，シマゆみたが日本語の語源，貴重な文化であることを表している。誇るべき言語文化・シマゆみた。子どもたちだけでなく，家庭や地域の方々とその誇りを共有する必要性を感じた。

(2)　地域人材を活用した連携体制の構築及び指導法研究

地域や関係機関・団体等との連携については「きかい学校応援団ボランティア活動」の一覧（毎年見直しが必要）を活用することを原則とした。きかい学校応援団には，支援可能分野・教科・内容が記載しているので，それを確認の上，〈図５〉に示す流れで支援を申し込むことを昨年度より職員全体で共通理解している。



〈図５〉

写真は，広報委員会の放送練習の様子である。子どもたちがシマゆみたに触れる機会を増やすため，これまでの共通語での放送を少しずつシマゆみたに変えることにした。事前に共通語の放送原稿を渡し，各集落の方言シマゆみたに直してもらい，練習の流れや指導内容を打ち合わせ，計画的に子どもたちへの指導ができるようにしている。

また，毎年，八月踊りは地域女性連絡協議会に連絡をとり，紹介していただいた方々に指導をお願いしているが，組織が無い地域もある。その場合，区長やＰＴＡ役員に相談し，人材を確保することにしている。

３　指導法の工夫改善

(1)　シマゆみたの取組

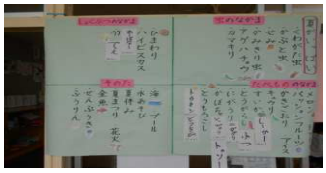
教科等横断的な取組として，シマゆみたを授業の中に取り込んでいく授業の工夫改善を行った。教育課程に書き込んだ矢印を元に，各学年の教科等の授業の中で，どのような授業展開ができるかをそれぞれ担任や教科担当が検証し，実践報告会で情報交換を行った。

ア　興味をもたせる導入及び取組の工夫

（ァ）　２年生「国語」での実践

共通語での言葉集めに加えて，シマゆみたでの言い方を取り入れた。

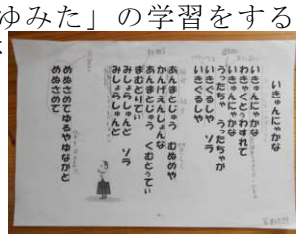
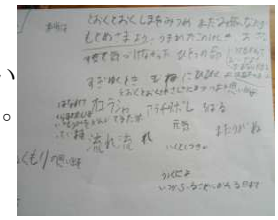
単元名		きせつのことば②　夏がいっぱい
教師	教科のねらい	◎言葉には，事物の内容を表す働きがあることに気づくことができる。 ❍経験したことや想像したことから書くことを見つけることができる。
	伝統文化のねらい	シマゆみたでは夏に関する言葉をどのように言うのかを理解する。
児童	本時の目標 （本時／総時数）	夏を感じる言葉を探すことができる。
伝統文化教育に係る手立て		・「夏に関する言葉」をそれぞれの地域のシマゆみたで紹介できるよう，事前に保護者や地域の人に聞いておく。 ・今後，シマゆみたをいつでも使えるよう,授業後の掲示物を工夫する。

過程	主な学習活動	時間	伝統文化に係る指導上の留意点
つかむ・見通す	1　季節について話をする。 2　本時の学習のめあてを確認する。 夏をかんじることばにはどんなものがあるだろうか。	（分） 3	❍　今，季節は何かを確認し,天気や気候のこと，春との違いについて自由に話をさせる。
調べる・深める	3　「みんみん」を音読する。 ❍　見つけた言葉（せみ，あみ，うみ，なみ）を朱で囲む。 4　夏を感じる言葉を探して,ノートに書く。 5　シマゆみたで何というかを調べて，ノートに付け加える。 6　探した夏に関する言葉とシマゆみたを発表し,何の仲間かを考える。 	３７	❍　「みんみん」の詩の中に夏に関する言葉を見つけさせる。 ❍　以前,家庭学習で行ったノートを配布し，夏に関する言葉をシマゆみたで何というかを理解させる。 ❍　地域によって，言い方が違うので,他の地域の言い方を理解したり，自分の地域のことをもっと知りたいと思ったりするような声かけをする。
まとめる・ふり返る	7　本時をふり返り，次時の見通しをもつ。 夏をかんじることばには，カブトムシ，とうもろこし（トウミン）などがあります。	5	❍　４つの仲間に分けられた「夏に関する言葉」やシマゆみたをいつでも，見たり,使ったりできるよう模造紙に書いて貼り，次時への活動へ繋げる。 

（ｲ）　６年生「音楽」での実践

シマゆみたを使った音楽をもとに，そこにこめられた想いについて意見の交流を行った。

題材名		詩と音楽の関わりを味わおう
教師	教科のねらい	日本語の表現の豊かさを味わう中で，そこに込められた想いが伝わる旋律のよさ（曲想）を感じ取る。
	伝統文化のねらい	シマゆみたを聞き取り，歌詞の意味と曲想の関係について感じたことをもとに情景を想像し，現代のシマ唄に親しむ。
児童	本時の目標（本時／総時数）	シマゆみたの入った歌謡曲（ＣＤ）「南ぬ風～ヘェぬカディ～」（歌手：牧岡奈美さん）を聞き，どんなシマゆみたが聞こえたか確かめ，何を伝えたい歌なのか，考えたことを交流する。　（1/2）
伝統文化教育に係る手立て		・「いきゅんにゃかな」の歌詞を調べた時のワークシートを振り返ることができるようにする。 ・現代の若い人でもシマゆみたを歌詞にして歌を作っていることを知ることで，郷土を離れても方言が大事にされていることや自分たちもそれを引き継ぐことができることに気付かせる。

過程	主な学習活動	時間	伝統文化に係る指導上の留意点
つかむ・見通す	1　５年生の時に「いきゅんにゃかな」の歌詞の意味を調べたことを想起する。 2　めあてを立てる。 シマゆみたの中に，どんな気持ちが込められているのだろう。	（分） 5	○　５年生の時に自分で書いたワークシートをもとにして，今年度も身近なところから「シマゆみた」の学習をすることを再認識させる。 
調べる・深める	3　ＣＤを聞いて，聞き取れたシマゆみたを書き出す。 4　聞き取れた言葉を確かめながら，歌詞を読み解いていく。 5　どんなことを伝えたかったのか発表し合う。	35	○　数回聞くことで耳慣れさせ，聞き取れる（メモできる）言葉を増やしていくようにする。 ○　歌詞のコピーを配り，どんな意味か教児で確かめ合う。このとき，教師側の感じたことと子どもたちの感じたことの違いも明確にしていく。 ○　一人一人の感じ方の違いも認め合うようにさせる。
まとめる・ふり返る	6　まとめる。 シマゆみたで表現することで故郷や親を大切に思う気持ちが強く伝わる。 7　ＣＤに合わせて歌ってみる。	5	○　シマゆみたで歌うことによって，標準語では表せない微妙なニュアンスが伝わり，喜界島を離れた人が島や親を想う気持ちが強く表現され，より素敵な曲になっていることをまとめる。 

イ　伝統文化に対する理解を深め発信するための指導法の工夫

上学年においては，様々な発信の工夫も授業の中に取り入れた。

（ァ）　５年生「国語」での実践

夏を感じる言葉をシマゆみたで文章にし，それに合う写真と組み合わせてカードを作成した。

単元名		夏の夜
教師	教科のねらい	季節の訪れを，先人の残した季節の言葉で感じ分け，新たに季節の言葉を創造する。
	伝統文化のねらい	理由（なぜかというと）を表すシマゆみたの実践的活用をすることができる。
児童	本時の目標（本時／総時数）	自分が感じた夏を写真や絵で伝えよう。（２／２）
伝統文化教育に係る手立て		・各集落ごとの理由の言い方を確認し，集落ごとの統一を図る。 ・方言への変換は自学課題で行い，家族や地域の方との方言についての関わりをもたせる。

過程	主な学習活動	伝統文化に係る指導上の留意点と支援
つかむ・見通す	１　前時の内容を確認する。 ・　枕草子を音読する。 ・　前時に作成した「自分が感じた夏（現代語版）」を音読する。 ２　本時の学習課題をつかむ。 自分が感じた夏を写真や絵で伝えよう。	○　部分ごとに古文を現代語に訳す作業を行う。（方言活動との関連） ○　各集落ごとの★（「なぜかというと」のシマゆみた版）を掲示しておく。 【夏ちば～（早町・小野津）】 【夏ちりば～（志戸桶）】 【夏ちぃばぁ～（嘉鈍）】
調べる・深める	３　１文目をシマゆみたに変換する。 ・　枕草子「夏は夜」の部分訳を行う。 例）夏っちば夜，夏ちりば日焼け ４　２文目のシマゆみたを確認する。 ・　表記の仕方 ５　PPT を用いてカード作成を行う。 ・　作成の仕方の確認 ６　「自分が感じた夏（シマゆみた ver）」を発表する。	○　教科書訳は「夏は夜がいい」だが「夏といえば夜！」と捉えさせ，★と関連させられることへの気付きに繋げる。 ○　文字にした時の共通理解をしておく。 ・　シマゆみたをカタカナにしない。 ・　拗音については教えてもらった表記を基本にする。（どぅ，どー等） ○　文節に気を付けて行替えを行うように指導する。 ○　自学でシマゆみたに変換する際に発音も習うよう，事前に指示を出しておく。 ○　シマゆみたのみをゆっくり２回発音する。（現代語は前時に発表済み）
まとめる・ふり返る	７　本時のまとめをする。 言葉の意味には広がりがある。 ８　自学内容を確認する。 ・「自分が感じた夏２」の作成 ９　次時の活動を確認する。	○　児童から出た言葉でまとめる。 予定では「基本の方言を覚えておくといろいろな使い方ができる。」であったが，１学期に学習した「言葉の意味が分かること」の要旨とうまく結びつけた発言が出たため，それを用いた。既習事項を方言の分野にも結びつけられることを確認できた。 ○　１文目だけでもシマゆみたを使ってみるように指導する。

（ｨ）　５年生「外国語」での実践

シマゆみたを直接使う学習ではないが，喜界島の魅力として「シマゆみた」という方言があることにも触れさせた。同じ取組を６年生でも実施した。

単元名		Check　Your　Step1（外国人の人にメッセージを伝えよう）
教師	教科のねらい	子どもたちに英語で俳句を作らせる。そして，喜界島の風景や魅力を外国の人に発信する。コンテストにも応募する。
	伝統文化のねらい	島の風景や魅力，喜界町，地域集落への思いを俳句にする。その際に，シマゆみたも話題として扱う。
児童	本時の目標（本時／総時数）	五・七・五や季語を気にしないで心に浮かんだ喜界島のイメージを３行の英語で表現する。（26/26）
伝統文化教育に係る手立て		部門では児童間とサンゴ特別部門があるので，サンゴをテーマにした俳句についても指導する。

過程	主な学習活動	時間	伝統文化に係る指導上の留意点
つかむ・見通す	1　挨拶をする。 2　めあてを立てる。 喜界島の魅力について考えよう。	（分） 5分	・　気分や日付などについて聞く。 ・　島の風景や魅力，喜界町，地区，集落への思いを俳句にしてコンテストに応募することを周知する。
調べる・深める	3　喜界島の風景や魅力を考えさせる。そして，俳句を作る。 4　子どもたちどうしで話し合いをする。 5　話し合ったことを発表する。	15分 10分	・　俳句を作る際，標準語と方言で作成させる。 ・　方言で作成した際は，各地域との差異について話し合う。 ・　共通語と方言で発表させる。
まとめる・ふり返る	6　学習のまとめをする。 喜界島の魅力を外国人に英語で伝えることができる。 7　教師の方で俳句を英語に直し，依頼部署にメールにて送付する。 8　次時の予告を知る。	15分	・今回は，五・七・五や季語を気にしない俳句の作成を行ったが，次回は定型詩に挑戦することを周知する。

以上のように，様々な教科でシマゆみたを取り入れることによって，子どもたちにとって身近なものとなってきている。また，授業との関連でシマゆみたを調べる家庭学習において，進んで地域の方や祖父母のところへ尋ねて行くなどの交流も増えている。そのことにより，地域でのシマゆみたへの意識も高まっている様子が感じられる。各学年で実践したことは，多くの子どもたちの目に触れることができるよう，学習で使用した掲示物及び子どもたちの作品を廊下側に掲示するように配慮した。

(2)　八月踊りの取組

本校では，毎年運動会で地域に伝わる「八月踊り」を踊っている。練習の際には，地域の方々に指導をいただき，本番でも一緒に踊りの輪に入ってもらっている。昨年度より，子どもたちが八月踊りの由来や唄の意味を理解し，八月踊りの質を高めるための指導の形態の工夫に取り組んでいる。

ア　興味をもたせる導入及び取組の工夫

授業の最初にゲストティーチャー（ＧＴ）に自己紹介をしていただいている。本年度の踊りとなる集落の場所（そこに住む児童も紹介）や児童達とのつながりについても話を広げていただき，子どもたちがゲストティーチャーを身近に感じられるようにした。

また，昨年度より，廊下のロビーにその年の八月踊りの歌詞と絵を貼り，１～４年生にも歌詞の意味を分かりやすく覚えてもらうための取組を行っている。可視化することで子どもたちも１番，２番，・・・・・・の歌詞の全体的な意味だけでなく，歌詞に使われている単語の解釈の助けとなっている。

イ　伝統文化に対する理解を深め発信するための指導法の工夫

全校児童参加の第１次では，八月踊りの歴史や由来，歌詞の簡単な意味等も教えていただき，子どもたちが八月踊りを踊る理由や伝統文化を守る意義について考え始めるきっかけ作りをしている。

今年度は教育課程を工夫し，八月踊りの指導時間を昨年より増やすようにした。特に５，６年生は，全体の中心となって活動するため，唄や踊りに加え，太鼓の演奏も学習時間の中で十分練習することができるように計画した。地域の方々との交流を図りながら，子どもたち一人一人がそのよさを感じ取り，発達段階に応じた八月踊りへの思いを深めて踊ることができるよう，活動の工夫改善を行った。

参考資料　【八月踊りを学ぼう】学習計画

（１・２年体育５時間　３・４年：全５時間，５・６年：全６時間総合的な学習の時間）

１　ねらい

(1)　八月踊りに込められた意味や願いを知り，その歴史や伝統を守ることの大切さを理解する。

(2)　八月踊りの練習を通して地域の方と交流し，方言や伝統文化の大切さを考え，

自分なりに表現できるようにする。

(3)　踊る楽しさを知り，各地域の八月踊りに進んで参加しようとする意欲をもたせ，これからも伝統文化を大切にしていこうとする態度を養う。

2　ＧＴとの活動時間

（全学年合同練習：第１次，第３次）２時間

（５，６年生の特別練習：第２次）　４時間

3　活動計画　　地域人材活用●　担任のみ▲

次	日	主な学習活動	時	職員の動き	ＧＴの動き	
第１次・体育館	９月10日	１　本時のねらいと流れを知る。 ２　本時のめあてを確認する。 八月踊りについて知ろう。 ３　八月踊りの歴史や由来，今回の唄の歌詞や踊り方などについて地域の方の話を聞く。 ４　実際に踊ってみる。 ※　第１回目は，動きが分かりやすいように各学年横１列に並んで練習する。（各１０分×２曲） ５　本時の振り返りをする。	５分 15分 20分 ５分	○本時のねらいと流れを説明する。 ○めあてを掲示する。 ○地域の方の補助をする。 ○歌詞を掲示・指示する。 ○隊形の指示を出す。 ○児童の発表の補助を行う。	○代表が団体の紹介をする。 ○八月踊りについて話す。 ○ステージ上で踊る。 ○子どもの感想と交流する。	●
第２次	別に記載	☆　各学年毎に八月踊りの練習を行う。 ☆　三味線担当の職員は各自自主練習を行っておく。	1~4年	・ＤＶＤを使用して練習する。		▲
			5･6年★	・ＧＴによる唄・踊り・太鼓の指導のもと，練習を行う。		●
第３次・運動場	９月28日	１　本時のねらいと流れを知る。 ２　本時のめあてを確認する。 八月踊りの練習をしよう。 ３　踊りの確認をする。 ※　学年毎一列で並んで踊る。 ４　本番の隊形で踊りの練習を行う。 ※　リハーサルを兼ね，入場・踊りなど一連の流れを通す。 ５　本時の振り返りをする。 ※　児童代表お礼の言葉	５分 20分 15分 ５分	○本時のねらいと流れを説明する。 ○めあてを掲示する。 ○動きの確認。 ○カウントを打つ。 ○各ポイント箇所の児童確認を行う。 ○児童の発表の補助を行う。 ○代表児童の指導	○本日押さえたいポイントを職員と確認をする。 ○踊りをレクチャーする。 ○輪の中を中心に適宜必要な児童の近くで踊る。 ○子どもの感想と交流する。	●

★部の活動については以下に別計画を掲載。

４　留意点

・　地域の方の様子を見ながら，適宜水分補給や休息等を入れるなど活動を柔軟にして，熱中症への対応も行う。

・　新型コロナウイルスへの対応を十分に行う。（換気，大型扇風機の設置，マウスシールドの着用）

・　新型コロナウイルス対策のため，今年度は，児童と職員と担当集落の方々のみで踊る。

・　１～４年生の学級での踊りの練習には町作成のＤＶＤを活用する。ＤＶＤ，音源ＣＤ共に歌詞や調子が聞き取りにくい部分や音が飛んでいて踊りにくい部分がある。そのため，三味線奏者に主旋律の演奏をお願いし，それを録音したものを練習に使うようにする。

★　第２次の活動計画

(1)　ねらい

・　地域の方との交流を通して，嘉鈍地区の「すんがねぃかー」と白水地区の「みんちゃさやー」それぞれのシマゆみたの歌詞の意味を理解する。

・　昨年度までの地域の踊りと比較しながら細部まで正しく踊り，歌詞の意味を考えながら歌ったり，太鼓の演奏ができるようにする。

・　歌と太鼓に合わせてみんなで踊り，みんなで踊ることの楽しさを感じながら，伝統文化を大切にしようとする態度を養う。

(2)　対象学年　５・６年生

日	過程	主な学習活動	時間	職員の動き	ＧＴの動き
9月12日	つかむ・見通す	１　本時のねらいと流れを知る。 ※　唄・踊り・（太鼓） ２　自分のめあてを立てる。 唄の意味を知り，もっと上手に踊れるようになろう。	10分	○本時のねらいと流れを説明する。 ○めあて枠を掲示する。 ○ワークシートに記入させる。	○本日の達成事項を職員と確認する。 ○地区ごとに分かれ，担当職員の指示を待つ。
	調べる・深める	３　学年ごとに分かれて，それぞれの曲の歌詞の意味について知り，踊りの練習をする。 ○　５年生（嘉鈍→白水） 「すんがねぃかー」→「みんちゃさやー」 ○　６年生（白水→嘉鈍） 「みんちゃさやー」→「すんがねぃかー」 ※　一人一人太鼓のリズムを膝で叩きながら歌うようにする。 	各30分×２曲（10分休憩含む）	○それぞれの学年で，グループを作らせる。 ※地域の方の参加人数によってグループ数は調整する。 ○ある程度話ができたら，輪を作って踊り，細かな足や手の動きを習うよう，子どもたちに指示する。	○子どもたちのグループへ数名ずつ入り，シマゆみたの話や踊りの話等をする。 ○子どもの輪の中に入り，できていない動きを教える。 ・足のステップ ・手の巻き方等

	まとめる・ふり返る	4　全体で輪になって踊る。 ※　歌ってみたい子にはマイクで歌わせる。 ※　太鼓を叩いてみたい子も同様。 5　本時を振り返り，次時への意欲をもつ。 ①　ワークシートへ記入する。 ②　ＧＴへお礼を言う。	20分	○本時の仕上げとして，全体で輪になって踊る。 ○児童の発表の補助を行う。 ○それぞれ近くの方に自分の言葉でお礼を伝えさせる。	○子どもたちの間に入って一緒に踊る。 ○子どもの感想と交流する。 ○近くにいる子どもへの声かけをお願いする。
		１７日と２４日の流れは１２日と同じだが３の活動での重みを変えた。			
9月17日	調べる・深める	3　学年ごとに分かれて，踊る練習をする。 ※「歌いながら踊る」 	30分	○歌詞ボードを児童が見やすい位置へ移動させる。 ○すんがねいかーは難しいので最低限『サアサすんがねぃかー』の部分だけは歌うよう指導する。	○唄を歌う係がマイクで歌う。 ○「右」「ポン」「巻いて」など動きのポイントを口ずさんでもらう。
9月24日	調べる・深める	3　学年ごとに分かれて，踊る練習をする。 ※「三味線・太鼓に合わせて踊る」 	30分	○太鼓役の児童に付く。 ○三味線担当職員は演奏する。 ○踊りだけに集中しないように，歌詞を誘導しながら踊らせるようにする。	○唄を歌う係がマイクで歌う。 ○足が揃っていない児童についてもらう。

以上のような取組を行い，以後考えられる発信方法については，

①　運動会で地域の方々と一緒に踊る。

②　２月の学習成果発表会で観客と一緒に踊る。

③　八月踊りについて学んだことを学校新聞や学校のＨＰ等に掲載する。

④　地域行事でそれぞれの地区の八月踊りを踊る。

等が考えられる。特に④の地域行事での八月踊りへの参加がこの研究の一番目指すところである。子どもたちが踊ることで，多くの映像や画像が残ることが期待される。今後，総合的な学習の時間のまとめとして発信する活動を教育課程の中に入れていきたい。

(3)　学校と地域のつながりの深化を図る取組

毎年担当地区が変わり，唄も踊りも変わるため，担当者を中心に以下の①～③を留意する。

① 八月踊りの担当（２人）については，校務「伝統文化教育」の職員とする。もう一人は校務「郷土教育」もしくは喜界島出身の職員を配置するのが望ましい。１学期のうちに学習の意図を伝え，地区の人材を掌握・連絡し，２学期までに細かい打合せ等をしておく。

② 担当者（ＧＴ）を招き，管理職も含めて６時間分の日程と計画を打ち合わせをする。

＜８月２４日の職員研修＞

③ ２学期開始までに「伝統文化教育（八月踊り）」の校内研修を設定し，ＧＴに職員が踊りを習う時間を設ける。対面して交流する機会を少しでも増やし，心が通った温かみのある活動づくりに努める。

５ 今年度の成果（○）と課題（●）

○ 職員が歌や三味線を練習し，生音で踊ったことで子どもたちの踊りも力強く，時折奏者を見ながらリズムをとる児童もおり，八月踊りをみんなで作り上げているようであった。（仮説２）

○ 子供たちが昨年と今年の唄の歌詞と比較し，「八月踊りには同じ歌詞が使われている」「同じ唄でも地域によって歌詞が違う」など多くの気付きをもち，地域のよさに気付くようになった。（仮説３）

○ 自分の地域の祭事に参加し，八月踊りの輪に入る子どもたちが多くなった。そこで自分の地域の唄や踊りの特色を感じていることから伝統文化を継承しようという意識が感じられる。（仮説４）

● 喜界町文化協会が発行している「八月踊り唄歌詞集」を参考にしているが，その地域の方の発音と異なる点がある。打合せをする際に，歌詞の確認も同時に行い，子どもたちの指導がスムーズに行えるような指導計画を作成する。（仮説１）

● 踊り手は見つかるが唄い手はなかなか見つからない。児童の前で緊張してしまう指導者も多いので，日頃から，学校の取組を積極的に公開し，地域の方の性格や特徴を掴んでおきたい。そして，何より子どもたちとの交流の機会を少しでも多くしたり，フリートークの時間を設けたり工夫することで，学校と地域が参画して伝統文化の推進を図っていく。（仮説２）

● コロナ感染対策として，今年度は担当地域（白水・嘉鈍）の踊り手のみ一緒に踊った。「新しい生活様式」の中で，「伝統文化・八月踊り」を体験的・探求的に学べるよう工夫して来年度以降に繋げていく必要がある。（仮説３）

４　伝統文化に関する実態調査と分析・考察

(1)　児童・保護者・職員・地域の意識及び実態調査

ア　実態調査実施概要

多数の伝統・文化の中から，「シマゆみた」と「八月踊り」の意識・実態調査を行った。児童用を下記のように作成し，実施した。職員，保護者，地域用もこれを基に作成し，実施した。

イ　アンケート用紙

シマゆみたと八月踊りについて，それぞれ６，７項目を設定して質問紙を作成した。また，自由記述で喜界島について知っていることや学習したことを記述してもらった。児童用をもとに，保護者，職員，地域の方用をそれぞれ作成した。

＜「島ゆみた」について＞
（知識・技能）
①　あなたは，喜界島の方言の意味が分かりますか。
　１　分かる　　２　少し分かる　　３　あまり分からない　　４　分からない

②　奄美大島の「島ゆみた」は２００９年，ユネスコの消滅の危機にある言語・方言「奄美語」と指定されていることを知っていますか。
　１　知っている　　２　少し知っている　　３　あまり知らない　　４　知らない

③　あなたは，方言を話しますか。（つかいますか。）
　１　よく話す　　２　時々話す　　３　あまり話さない　　４　話さない

④　あなたは，方言を話したいと思いますか。
　１　話したい　　２　できるなら話したい３　あまり話せなくてもいい　４　話せなくていい
　選んだ理由を書いてください。

（思考力・判断力・表現力）
⑤　「島ゆみた」について課題意識をもって取り組みましたか。
　１　思う　２　どちらかといえば思う　３　どちらかといえば思わない　４　思わない

⑥　「島ゆみた」を調べて分かったことを，自分なりに整理・分析することができましたか。
　１　思う　２　どちらかといえば思う　３　どちらかといえば思わない　４　思わない

⑦　「島ゆみた」を調べて分かったことをもとにして，自分の意見を発表したり，書いたりして伝えることができましたか。
　１　思う　２　どちらかといえば思う　３　どちらかといえば思わない　４　思わない

＜「八月踊り」について＞
（知識・技能）
①　「八月踊り」を踊りますか。
　１　よく踊れる　　２　少し踊れる　　３　あまり踊れない　　４　踊れない
　選んだ理由を書いてください。

②　「八月踊り」がどのようにして生まれたかを知っていますか。
　１　知っている　　２　少し知っている　　３　あまり知らない　　４　知らない

③　「八月踊り保存会」の活動を知っていますか。
　１　知っている　　２　少し知っている　　３　あまり知らない　　４　知らない

（思考力・判断力・表現力）
④　「八月踊り」について課題意識をもって取り組みましたか。
　１　思う　２　どちらかといえば思う　３　どちらかといえば思わない　４　思わない

⑤　「八月踊り」を調べて分かったことを，自分なりに整理・分析することができましたか。
　１　思う　２　どちらかといえば思う　３　どちらかといえば思わない　４　思わない

⑥　「八月踊り」を調べて分かったことをもとにして，自分の意見を発表したり，書いたりして伝えることができましたか。
　１　思う　２　どちらかといえば思う　３　どちらかといえば思わない　４　思わない

ウ　実施時期

アンケート用紙の作成と依頼する地域の人の選定に手間取り，実際の実施時期は下のようになった。

	児童	職員	保護者	地域の方
１回目	2019 年 9 月下旬	2019 年 9 月末	2020 年 1 月	2020 年 3 月
２回目	2020 年 2 月	2020 年 2 月		

(2)　結果分析と課題把握（別紙Ｂ参照）

ア　児童　　２回目のアンケート結果・考察（１回目との比較）

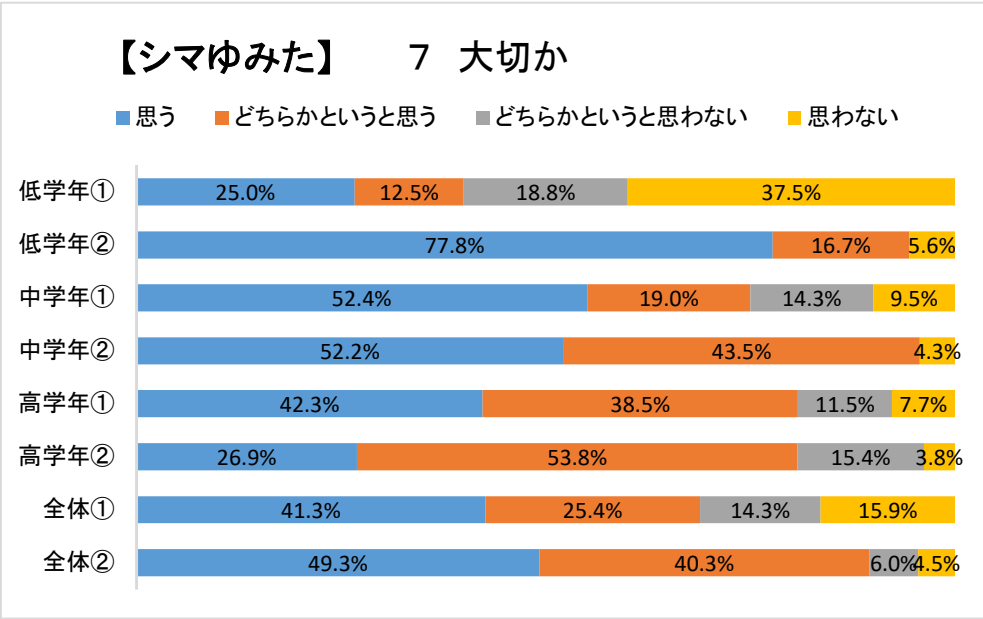
＜シマゆみた＞

○「分かるかどうか」について「少し分かる」と答えた子どもが全体で 67.2 ％と 25.9 ｐと増えている。低学年では，55.6 ｐの増である。一方で，「分かる」と答えた子どもは 5.2 ｐ減っている。これは，「難しい」「よく分かっていない」「もっと知りたい」という意識の表れではないだろうか。

○「危機言語であると知っている」「話したい」「残す必要はある」「知りたい」「大切である」と答えている子どももそれぞれ増えてきている。シマゆみたへの興味の高まりがあると捉えられる。

○「分かる」「少し分かる」が増えた要因として，シマゆみたの校内掲示や朝の放送等があり，その成果と考えられる。

○　１回目のアンケートで，高学年の中には，方言を話したいと思わない理由として，「方言は使わないから」「方言を話せなくても生きていける」「都会に行ったら通じないから」と挙げている子どもがいた。親や祖父母世代が言われてきたことを伝え聞いていると考えられるため，親，祖父母世代へも「方言を伝えることの大切さ」や「指導の方向性の転換があったこと」などを伝えていく必要があると職員で一致した。２回目のアンケートでは，「残していきたい」「伝統を受け継ぎたい」と変わってきている。１年間の取組の成果が感じられる。一方，「話せなくても子どものうちは変わらない」「この頃は話せる人が少ないため，意味が通じないから」と考えている子もいるので，一層の取組が必要である。



＜八月踊り＞

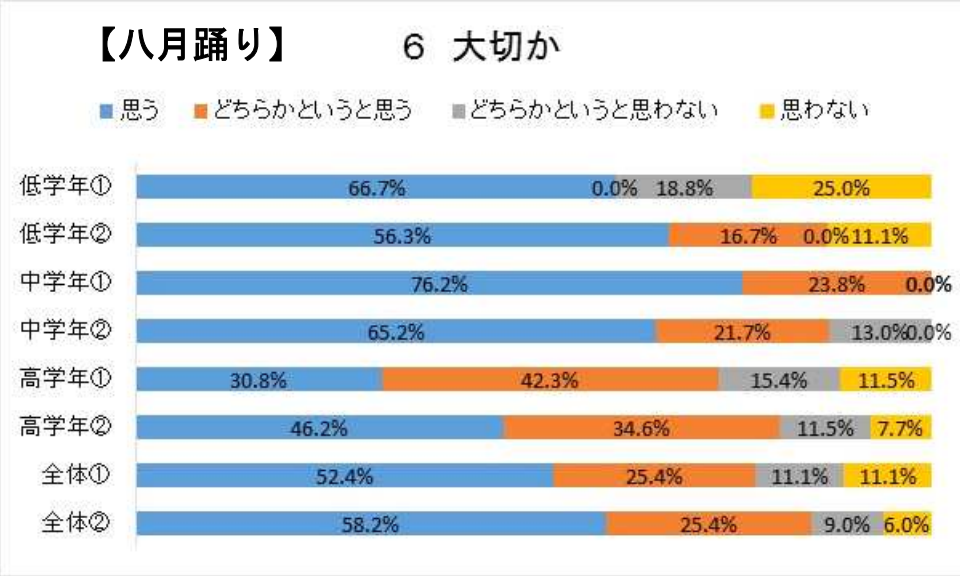
○「踊れるか」という設問について，「少し踊れる」と答えた子どもが全体で 64.2 ％と 34.2 ｐ増えている。一方で「よく踊れる」と答えた子どもが 6.9 ｐ減っている。これも「難しい」「もっと上手く踊りたい」「他の踊りも知りたい」という意識の現れではないかと捉えられる。地域での八月踊りでは学習していない踊りが多いため，そばで見てはいるが踊りの輪に入ろうとしていない様子が見られる。

○「発祥等の知識」を「知らない」と答えた子どもが 77.8 ％から 55.2 ％と減っている。学習の成果だと捉えられる。

○　保存会の存在を知らないと答えた子どもは，13.1 ｐ減っている。

○「残す必要がある」「どちらかというと知りたいと思う」「大切であると思う」と答えた子どもが少しずつ増えている。

○　低学年は「知りたいと思う」が増えているが，中学年，高学年では減り，「どちらかというと思う」が増えている。八月踊りの数の多さや集落毎に違うことに戸惑いがあり，少し消極的になってきたのかと思われるが，八月踊りに関する認識が深まってきたからこその戸惑いとも受け取れる。



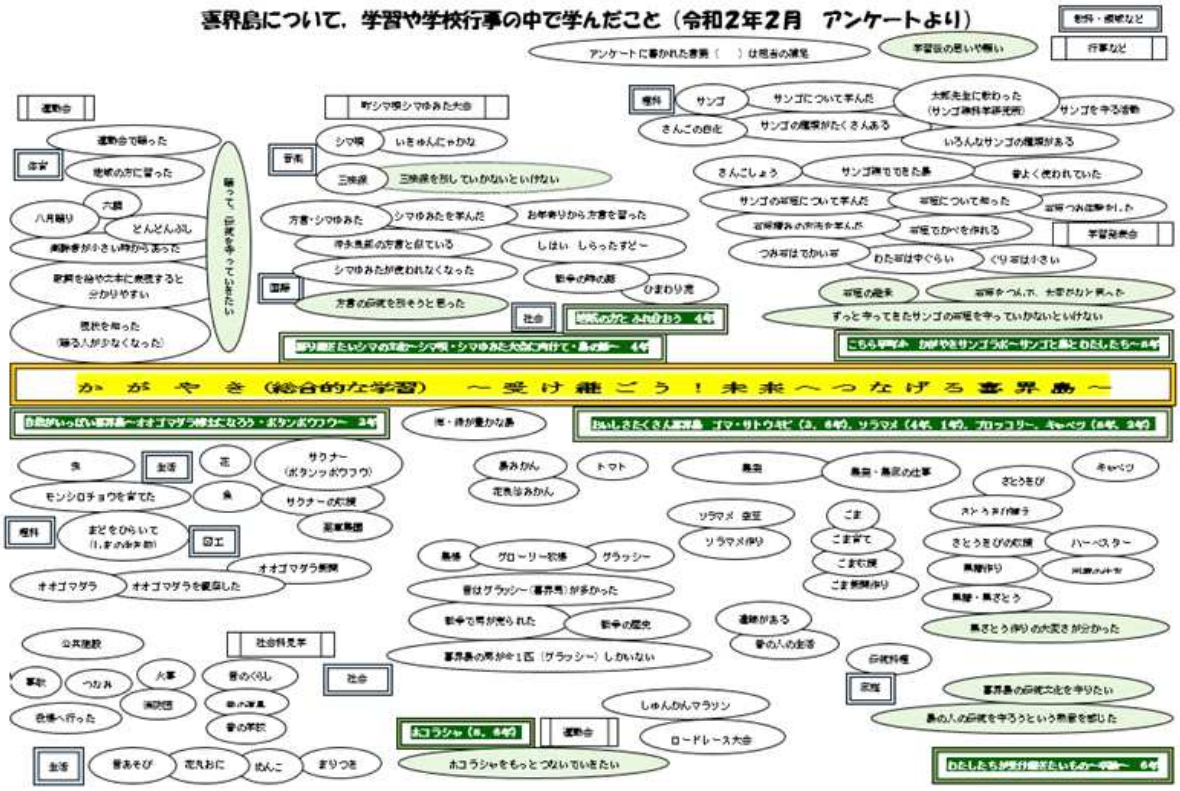
＜共通＞

○　４年以上の子どもは，シマゆみたや島唄・三味線，八月踊り等の授業にゲストティーチャーとして地域の方に参加していただいた。それらの授業を通して，伝統・文化の学習は，地域の方とつながりをもてる手段の一つとして捉え，もっと地域の方々と一緒に学びたいと考えている様子がうかがえる。

○　「方言をもっと話せるようになりたい」「八月踊りを踊れるようになることは自分自身にとって大切である」と答えた子どもたちのその理由欄（自由記述）には，「島のお年寄りと話せる」「おとうさんがおじいちゃんと話している」「おじいちゃん，おばあちゃんが喜んでくれる」「八月踊りを覚えて楽しませたい」と書かれており，祖父母や地域の方々，特に高齢者との触れ合いを意識していることがうかがえる。

＜学びの様子＞

○　１回目のアンケートでは，喜界島に関する学習の内容でない言葉や教科，行事が書かれており，まとめることができなかった質問項目であった。２回目では，喜界島に関して学習したもののなかから，たくさんの言葉や学んだことの詳細が記入された。全校児童分をまとめたのが次の表である。教育課程編成で意識した教科・領域と関連付けてまとめてある。



イ　職員（島内出身者３名含む）

・　「シマゆみた」がユネスコの指定を消滅危機言語であることは知っているが，転勤により，初めて触れる「シマゆみた」や「八月踊り」であるため，その由来や意味について詳しく知っている教職員は少ない。

・　伝統文化教育の取組によって，児童の関心・意欲は高まってきていると感じているが，知識や問題解決のための技能が高まっているとは感じられないようである。

・　「シマゆみた」や「八月踊り」の保存継承は大切であると感じているが，児童の地域の愛着が高まっているとは思えないと感じている教職員も多いことから，児童の地域での行事への主体的な参加が見られないことが考えられるのではないかと思う。

・　児童が地域の方とどのような関わりをもっているのかを把握するためには，教職員と地域との交流も大切になってくると感じられる。

・　伝統文化教育を進める中で，地域の方々との交流を通して，児童も教職員も積極的に地域行事に参加した。また，伝統文化継承のための啓発活動を行えたことで，地域と共にある学校つくりの推進において有効と考えたのではないかと思う。

・　伝統文化教育の研究指定校を受けたことをきっかけに，実践のためには

地域の方との連携が不可欠で，地域の方を知るきっかけとなった。

・「シマゆみた」「八月踊り」の学習について今後も関わってきたいと感じている教職員がほとんどで，学校と地域を結ぶ大切な学習である。

ウ　保護者（回収 77%　島内出身者 79%　島外出身者 15%　不明・未記入 6%）

＜シマゆみた＞

○　方言の意味が「分かる」「少し分かる」を合わせて８５％で，島外出身者も含めて，誰かが話す方言の意味は理解できている人が多い。一方，方言を話せるかという質問については「よく話す」「時々話す」が４４％と半数以下で，「話さない」と回答した３８％とさほど差がなく，二極化している。

○　話したいかという質問には，７１％が「話したい」「できるなら話したい」と回答し，８８％が残していく「必要がある」「どちらかと言えば必要がある」と答えている。

○　シマゆみたは自分にとって「大切である」４１％「どちらかといえば大切である」４７％で，合わせて９割弱が大切と答えている。また，子どもにとって「大切である」「どちらかといえば大切」と答えた保護者は７９％と高い。

○　方言が危機言語であることを「知っている」「少し知っている」と答えた人が約半数であることを考えると，知識でなく感覚として消えゆく喪失感と焦りを感じている人がいるのではないかと考えられる。

○　子どもにとって大切だという理由の多くは「地域の人，お年寄りと話す機会が増える」「祖先から受け継いだ伝統でなくさないようにしたい」「聞くと親近感がわき，懐かしくなるから」「標準語にない表現がたくさんある」と答えており，「親世代も含めて学び，次の世代に伝えていきたい」答えた方もいる。一方で，大切かどうかは「子ども次第」や高齢者とのコミュニケーションに大切と感じつつ「残っていかないと思う」と書いている人もいた。

＜八月踊り＞

○　八月踊りがどのように生まれたかを知っているという人はおらず，少し知っているという人が１５％であった。

○　八月踊りを踊れるかという質問に「踊れる」「少し踊れる」と答えた人は４７％だが，八月踊りの発祥を知っているのは６％，保存会に入って活動している人は１人もおらず，知っているという人が２６％であった。

○　残していくことが「必要だと思う」「どちらかと言えば思う」と答えた人が８８％，自分にとって大切だと「思う」「どちらかと言えば思う」が８２％，子どもにとって大切だと「思う」「どちらかといえば思う」が８８％と高かった。

○　子どもにとって大切だと思う理由には，「踊りも歌もそれぞれの集落にしかないものだから」「島で産まれて育っているからほこりとしてずっと残し，受け継いでもらいたい」「祖父母や集落の人と世代を超えて一つになれる感覚があり，楽しい」「後世に伝えて欲しい」「集落行事で歌う人や踊る人が少なくなってきたから」「中学校・高校でも踊るから」など多様

な意見が出された。反面，「あと５０年後には，方言同様なくなっていくのでは」ないかと残していく難しさを冷静に見つめた意見もあった。

○　大切な文化・伝統だから残していきたい，自分にとっても子どもにとっても大切だと考えながら，学校行事で学ぶことを機会としており，保存会や集落行事に参加しようとすることが少ない現状が感じられる結果である。

エ　地域（回収 33　30 代 2，40 代 4，50 代 6，60 代 12，70 代 8，80 代 1）

○　シマゆみたの使用頻度は，「毎日使う」が３３％「どちらかと言えば使う」１５％，「ほとんど使わない」が３０％である。

○　子や孫にシマゆみたを教えているという回答はなく，「教えていない」という回答が５１％で，「聞かれたら教える」という回答が３０％である。

○　シマゆみたがユネスコの消滅危機言語になっていることを「知っている」という回答は１８％，「少し知っている」を加えても３３％である。

○　シマゆみたや八月踊りの保存会があることを「知っている」という回答が６７％に対して，保存・伝承に向けた活動をしているという回答は1人で，４８％は「していない」と答えている。

○　回答者の９４％は「学校便り」等で子どもたちの活動に関心をもっている。職員が地域の方から「○○があったんだね。」などと記事について話をしていただけることもあり，学校教育や子どもたちの様子を把握していただいていると考えられる。

○　今回のアンケートの中で，講師依頼に応えてもらえるとした人は，１８％だったが，実際には今回アンケート依頼をしなかった地域の方が多数参加してくださっており，自分が講師をすることがなくても，区長さんたちは紹介の労を取ってくださっている。

オ　各アンケートの結果のまとめ

○　これまでの方言使用禁止の流れの中で，子どもや保護者の中にはシマゆみたが継承されていないことが伺える。また，消えてしまっている現状から，数十年後には完全に消えてしまうと考えている保護者・地域の方と継承して欲しいと願っている保護者地域の方々とに分かれていることも伺える。

○　八月踊りに関しても，踊る人や歌う人が少なくなってきていることからいずれ消えてしまうだろうとの意見も見られたが，継承を願う児童や保護者・地域の方々の方が多く，地域行事での参加や継承団体に所属して活動をしている方々もいた。学校での活動に協力していただけるようでもあった。

○　児童・職員へのアンケートからは，１年間の取り組みを通して，伝統文化教育を意識して学習するようになっており，学習内容の定着だけでなく，地域の方々との関わりの大切さやよさを感じていると考えられる。